人間発達科学部紀要　第９巻第２号：1－10（２０１５）

個人志向性・社会志向性が友人関係満足に及ぼす影響についての検討

姜　信善・南　朱里*

The Effect of individual and social orientedness on Satisfaction of Friend-Relationship

Sinsun KANG，Akari MINAMI*

キーワード：個人志向性・社会志向性，友人関係満足，精神的健康
keywords：Individual and Social Orientednes，Friend-Relationship，Mental Health

問題および目的

これまで，友人関係について多くの研究がなされており，その重要性について明らかにされてきた。たとえば，Hartup & Stevens（1997）によると，友人は適応を促進する認知的，感情的な資源であり，年齢段階に応じた発達課題の達成を助けるものであるとされている。また，親しい友人の存在は，親密さや関係性への欲求を満たし，全般的な well-being を高めることにもなるとされている（Baumeister & Leary, 1995；Buhrmester, 1996）。加えて，鈴木・長江（2012）の研究では，青年期の発達課題であるアイデンティティの確立を促進する友人関係が明らかにされ，早い年齢から良好な友人関係を達成するように努めることによって，自我の発達につながり将来の自己の方向性を決定する際に自ら積極的に取り組むことができるようになるとしている。このように，親密な友人関係が，個人の適応や精神的健康を高めるとし，その重要性が繰り返し指摘されている（岡田，2008）。

そこで，友人関係に関連する要因として，信頼感が取り上げられている。

たとえば，金子（1994，2002）の研究では，基本的信頼感が，青年期の良好な対人関係や親密性と関連していることを示している。この「基本的信頼感」とは，Erikson（1959）が定義したものであり，生後１年の経験から獲得される自己自身と世界に対する１つの態度であり，他者に関しては筋の通った信頼（reasonable trunstfulness）を意味し，自己に関しては信頼に値する（trust worthness）という感覚を意味するとしている（Erikson, 1959：小此木訳，1988）。また，他者に対する安定した信頼感を持っている場合には，人は対人関係に関する問題を感じることが少ない（Gurtman, 1992）とされている。

これらのことから，信頼感が対人関係に影響を及ぼしていることが示されており，信頼感が友人関係を円滑にする要因になり得ることが示唆される。

姜・南（2014）の研究では，信頼感に関する尺度が新たに作成され，以下に述べる３つの因子が見出された。第１因子は，他者に何かをしてもらい他者信頼を得るといった内容の「他者信頼」。第２因子は，ありのままの自分を受容し，自分に誠実に生きることで，自己信頼を得るといった内容の「自己信頼」。第３因子は，他者と比較することで，自己信頼を得るといった内容の「相対的自己信頼」。また，同研究において，信頼感の友人関係満足への影響を検討した結果，「他者信頼」や「相対的自己信頼」は，多くの友人関係満足に有意な影響を及ぼしていたが，「自己信頼」に関しては，友人関係満足に有意な影響はみられなかった（姜ら，2014）。このことから，自分を信頼するのはもちろんのこと，自己信頼の得られ方が，友人関係満足に関連する要因として，重要であることが示唆された。

これまで，信頼するという心理的側面について述べてきたが，それだけでなく，友人関係の中で，自他に対する振る舞い方が，友人関係満足につながるのではないかと考えられる。そこで，他者に対する振る舞い方として，個人志向性・社会志向性を取り上げて，みていくこととする。

* 兵庫教育大学大学院学校教育研究科人間発達教育専攻
臨床心理学コース　在学中

伊藤（1993a）は，志向性とは，自己概念を形成する際の基準の方向性を意味するとしており，志向性を「個人志向性」と「社会志向性」の２つに分類している。「個人志向性」とは，自分自身の内的基準への志向性であり，自分自身の個性を最大限に発揮できるという点で，自己実現に近い特性を意味する。一方，「社会志向性」とは，他者あるいは社会の規範への志向性であり，社会の中でうまく適応していくための特性を意味する（伊藤，1993a）。

また，伊藤（1993a, 1995）は，個人志向性・社会志向性のそれぞれに，適応的で成熟した特徴をもつポジティブな側面と，不適応的で未熟な特徴をもつネガティブな側面の２つがあるとしている。個人志向性のポジティブな側面とは，自立や個別化に意識が向かいつつ個性を尊重し主体的に行動する傾向のことである（伊藤，1993a）。個人志向性のネガティブな側面とは，他者存在を考慮しない利己性や共感の欠如を示す傾向のことである（伊藤，1995）。社会志向性のポジティブな側面とは，他者や社会との関係性に意識が向かい，他者との共存や社会適応を志向する傾向のことである（伊藤，1993a）。社会志向性のネガティブな側面とは，対人行動面でも情緒面でも不適応で，社会的にも自らを低く評価する傾向のことである（伊藤，1995）。

これらのことから，個人志向性に偏ると，自立や個別化に意識が向かいつつ，個性を尊重し主体的に行動するが，他者存在を考慮しない利己性や共感の欠如が問題になることが予測される。一方で，社会志向性に偏ると，他者や社会との関係性に意識が向かい，他者との共存や社会適応的に行動するが，主体性や能動性が弱く，他者への一方的な依存や過剰適応などの問題が予測される。

このように考えると，個人志向性・社会志向性のどちらか一方の志向性に偏る場合，その志向性のネガティブな側面があらわれ，友人関係を円滑なものとして築けず，高い友人関係満足が得られないのではないかと推察される。

また，小塩（1998）は，NPI-S によって測定される３つの下位側面である，「優越感・有能感」は他者よりも優れており有能であるなどの強い自己肯定感を意味し，「自己主張性」は自分の意見を述べるなどの能動的で積極的な自己愛傾向の側面を意味するとしている。そこで，小塩（2002）は，「優越感・有能感」と「自己主張性」を比較すると，「自己主張性」は個人志向性 N 尺度や，言語的攻撃と高い正の相関関係にあるなど，より自己中心的で攻撃的な特徴をあわせもつ点に特徴があり，友人から外向的で強い人間だと認識される傾向に関連することが示された。これは，「自己主張性」が有する能動的で積極的な特徴や攻撃的な特徴を友人も認識しているということであり，また「自己主張性」がもつそのような特徴は，実際の対人場面においても現れるものといえるとしている（小塩，2002）。

これらのことから，本研究では友人関係に影響を及ぼす要因として，個人志向性・社会志向性が推察され，取り上げていくこととする。

ここで，伊藤（1993b）は個人志向性・社会志向性の発達的研究として，年齢とともに個人志向性得点と社会志向性得点がどのように変化するのかを，性差を考慮しつつ，検討している。その結果は，男性は個人志向性優位，女性は社会志向性優位に変化していき，男性の個人志向性優位と女性の社会志向性優位のような性別による差は，青年期で特に顕著であるとしている。このことから，男女において，個人志向性・社会志向性の発達の方向が異なることが示された。そこで，特に青年期の男女において，個人志向性・社会志向性の友人関係満足への影響が異なってくるのではないかと推察され，青年期に相当する大学生を対象とし，男女別に検討していくことが必要であろう。

以上のことから，本研究の全体的目的は，個人志向性・社会志向性が友人関係満足への影響を，男女別に調べた上で，検討していくことである。

個人志向性・社会志向性が友人関係満足に及ぼす影響についての検討（研究1）

目的

個人志向性・社会志向性が友人関係満足に及ぼす影響について，検討することを目的とする。また，これらの影響が男女によって異なることが推察されるため，性別による検討を行う。

方法

【対象者】

大学生，計494名（男性227名，女性267名）

【調査時期】

2013年11月下旬～12月中旬

【調査内容】

個人志向性・社会志向性および友人関係満足に関

する各項目について，それぞれ「あてはまる」「ややあてはまる」「どちらともいえない」「あまりあてはまらない」「あてはまらない」の５件法で回答が求められた。

【測定尺度】

（1）個人志向性・社会志向性に関する測定尺度

信頼性・妥当性が確認されている伊藤（1993；1995）の個人志向性・社会志向性 PN 尺度が用いられた（Table 1）。

Table 1 個人志向性・社会志向性 PN 尺度

【個人志向性・社会志向性Ｐ尺度】

1 S. 人に対しては，誠実であるよう心掛けている
2 I. 自分の個性を活かそうと努めている
3 I. 自分の心に正直に生きている
4 S. 他の人から尊敬される人間になりたい
5 I. 小さなことも自分ひとりでは決められない●
6 S. 他の人の気持ちになることができる
7 I. 自分の生きるべき道がみつからない●
8 S. 他人に恥ずかしくないように生きている
9 I. 自分が満足していれば人が何を言おうと気にならない
10 S. 周りとの調和を重んじている
11 S. 社会のルールに従って生きていると思う
12 S. 社会（周りの人）のために役に立つ人間になりたい
13 I. 自分の信念に基づいて生きている
14 S. 人とのつながりを大切にしている
15 I. 周りと反対でも，自分が正しいと思うことは主張できる
16 S. 社会（周りの人）の中で自分が果たすべき役割がある
17 I. 自分が本当に何をやりたいのかわからない●

【個人志向性・社会志向性Ｎ尺度】

1 I. 周りのことを考えず，自分の思ったままに行動することがある
2 S. 何かを決める場合，周りの人に合わせることが多い
3 I. 自分の性格は，わがままだと思う
4 S. 人の先頭に立つより，多少がまんしてでも相手に従うほうだ
5 I. 個性が強すぎて，人とよくぶつかる
6 S. 人前では見せかけの自分をつくってしまう
7 I. 何ごとも独断で決めることが多い
8 S. なにか良くないことがあると，すぐ自分のせいだと考えてしまう
9 I. 自分中心に考えることが多い
10 S. 相手の顔色をうかがうことが多い
11 I. 人に合わせるよりは，たとえ孤独であっても自由なほうがよい
12 S. 人の目ばかり気にして，自分を失いそうになることがある
13 S. 困ったことがあると，すぐ人に頼ってしまう

項目番号直後の I, S はそれぞれ個人志向性，社会志向性を示す。また●は逆転項目であることを示す。
（伊藤美奈子（1993；1995）　個人志向性・社会志向性 PN 尺度（堀洋道監修／山本眞理子偏）心理測定尺度集Ⅰ―人間の内面を探る〈自己・個人内課程〉株式会社サイエンス社　p.129–133）

（2）友人関係満足に関する測定尺度

姜ら（2014）で作成された友人関係満足尺度が用いられた。（Table 2）

【分析手続き】

まず，個人志向性・社会志向性と友人関係満足との関連を検討するため，個人志向性・社会志向性の下位尺度項目得点と友人関係満足の下位尺度項目得点との相関関係を求める。

次に，個人志向性・社会志向性が友人関係満足に及ぼす影響について検討するため，重回帰分析を行う。

性別による検討を行うため，上述の手続きを，被験者全体，男性，女性を対象として行う。

Table 2 友人関係満足尺度

No　項目内容

F1「意志疎通満足」

22 スムーズに意志疎通が行え，話がはずむし，満足している
14 テンポよく，会話ができるし，満足している
4 冗談を言い合えるし，満足している
23 友人と共通の趣味や話題，盛り上がれるし，満足している
10 一緒にいて，楽しいと感じられるし，満足している

F2「相互的受容・理解満足」

1 一緒にいて気を遣わず，互いに素を出せるし，満足している
3 自分を分かってくれる，または，相手を分かってあげられるし，満足している
6 何でも，本音で言い合えるし，満足している
15 楽しい時間を過ごせるようにと気を配るが，私は心を開いたりはしないし，満足している
2 互いに，礼儀をわきまえているし，満足している
5 友人に対して，あまり期待しないし，満足している

F3「自己優先満足」

11 友人がどこかに行くときは，必ず誘ってくれるし，満足している
29 頻繁に遊びに誘われるし，満足している
12 物理的にも，常に友人と一緒にいれるし，満足している
19 相談事などは，必ず自分に言ってくれるし，満足している

F4「関係距離満足」

28 傷つけないよう，言葉遣いに配慮し，満足している
27 互いに干渉し過ぎず，互いのペースを守ることができるし，満足している
18 互いに，踏み込んでほしいと思える所までは踏み込むという，適度な距離感を保っているし，満足している
24 頻繁に会っていなくても，支え合っていると実感し，満足している

F5「関係維持満足」

21 あまり乗り気でなくとも，友人からの頼みであれば断らないし，満足している
25 自分の負担になっても，友人からの期待に応えようとするし，満足している
13 友人からの誘いには，無理をしてでも応えるようにしているし，満足している

姜・南（2014）　友人関係満足尺度
信頼感が友人関係満足に及ぼす影響についての検討
富山大学人間発達科学部紀要９巻　第１号 p.1–15

結果

第一に，被験者全体を対象にした分析結果について述べていく。

個人志向性・社会志向性と友人関係満足の関連について検討を行うため，相関関係が求められた。相関関係の分析結果は，Table 3-1 に示す。

「個人志向性 P」と，友人関係満足第 5 因子「関係維持満足」以外の 4 因子全てとの間に，有意な正の相関がみられた（第 3 因子との間に $p<.05$, それ以外の全てにおいて $p<.01$）。「社会志向性 P」と，友人関係満足尺度の 5 因子全てとの間に，有意な正の相関がみられた（$p<.01$）。「個人志向性 N」と，友人関係満足第 2 因子「相互的受容・理解満足」，第 3 因子「自己優先満足」，第 4 因子「関係距離満足」との間に有意な負の相関がみられた（第 2 因子との間において $p<.01$, それ以外全てにおいて $p<.05$）。「社会志向性 N」と，友人関係満足第 4 因子「関係維持満足」との間に有意な正の相関がみられた（$p<.01$）。

個人志向性・社会志向性が友人関係満足に及ぼす影響をより具体的に検討するため，個人志向性・社会志向性の下位尺度項目合計得点を独立変数，友人関係満足の下位尺度項目合計得点を従属変数とし，重回帰分析が行われた。重回帰分析の結果は，Table 3-2 および Figure 1 に示す。

①友人関係満足第 1 因子「意志疎通満足」に及ぼす個人志向性・社会志向性の影響

「社会志向性 P」においてのみ有意であり，偏回帰係数は，（β）=.308（$t(489)=6.15$, $p<.001$）であった。なお，このときの回帰式全体の説明率は，$R^2=.11$ であり，有意であった（$F(4,489)=15.75$, $p<.001$）。

②友人関係満足第 2 因子「相互的受容・理解満足」に及ぼす個人志向性・社会志向性の影響

「個人志向性 P」の偏回帰係数は，（β）=.153（$t(489)=2.80$, $p<.01$）であり，「社会志向性 P」の偏回帰係数は，（β）=.278（$t(489)=5.64$, $p<.001$）であった。また，「個人志向性 N」の偏回帰係数は，（β）=−.101（$t(489)=-2.19$, $p<.05$）であった。したがって，友人関係満足第 2 因子「相互的受容・理解満足」に及ぼす影響は，「社会志向性 N」を除く，全てにおいて有意であった。なお，このときの回帰式全体の説明率は，$R^2=.14$ であり，有意であった（$F(4,489)=21.00$, $p<.001$）。

③友人関係満足第 3 因子「自己優先満足」に及ぼす個人志向性・社会志向性の影響

「社会志向性 P」においてのみ有意であり，偏回帰係数は，（β）=.154（$t(489)=2.96$, $p<.01$）であった。なお，このときの回帰式全体の説明率は，$R^2=.05$ であり，有意であった（$F(4,489)=6.88$, $p<.001$）。

④友人関係満足第 4 因子「関係距離満足」に及ぼす個人志向性・社会志向性の影響

「社会志向性 P」の偏回帰係数は，（β）=.275（$t(489)=5.48$, $p<.001$）であり，「社会志向性 N」の偏回帰係数は，（β）=.104（$t(489)=1.98$, $p<.05$）であった。したがって，友人関係満足第 4 因子の「関係距離満足」に及ぼす影響は，「社会志向性 P」，

Table 3-1　個人志向性・社会志向性PN尺度の各項目合計得点と友人関係満足尺度の各因子項目合計得点との相関関係（全体）

	意思疎通満足	相互的受容・理解満足	自己優先満足	関係距離満足	関係維持満足
個人志向性 P	.176**	.220**	.102*	.119**	.042
社会志向性 P	.323**	.344**	.211**	.323**	.119**
個人志向性 N	−.044	−.158**	−.107*	−.093*	.047
社会志向性 N	−.007	−.066	.027	.086	.162**

** p＜.01（両側）　* p＜.05（両側）

Table 3-2 「個人志向性・社会志向性→友人関係満足」の重回帰分析の結果（全体）

	意思疎通満足	相互的受容・理解満足	自己優先満足	関係距離満足	関係維持満足
個人志向性 P	.091	.153**	.105	.104	.115*
社会志向性 P	.308***	.278***	.154**	.275***	.078
個人志向性 N	.031	−.101*	−.079	−.030	.049
社会志向性 N	.000	−.023	.060	.104*	.208***
重相関係数（R）	.338***	.383***	.231***	.336***	.224***

*** p＜.001　** p＜.01　* p＜.05

（注）数値は標準偏回帰係数（β）を表す

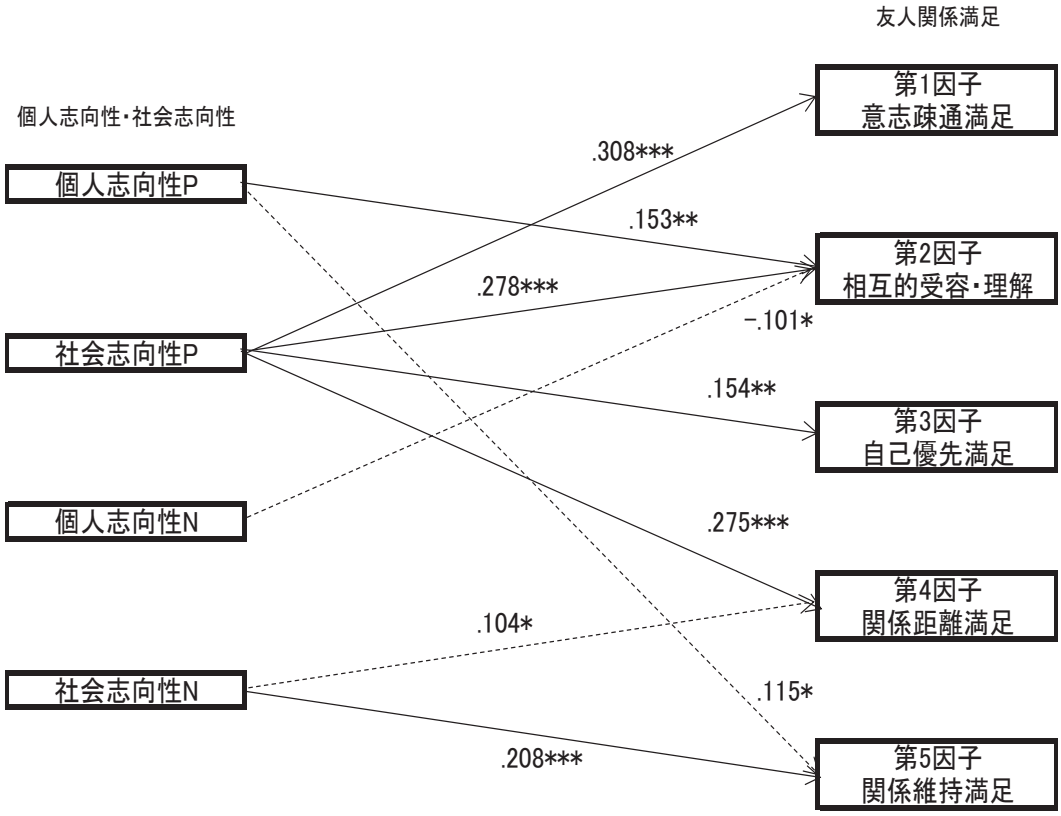

Figure 1 「個人志向性・社会志向性→友人関係満足」の重回帰分析の結果（全体）
（各数値はβ係数を表す）
*** p＜.001　**p＜.01　*p＜.05

「社会志向性 N」においてのみ有意であった。なお，このときの回帰式全体の説明率は，R^2=.11であり，有意であった（F(4,489)=15.59,p<.001）。

⑤友人関係満足第 5 因子「関係維持満足」に及ぼす個人志向性・社会志向性の影響

「個人志向性 P」の偏回帰係数は，（β）=.115(t(489)=2.00, p<.05）であり，「社会志向性 N」の偏回帰係数は，（β）=.208(t(489)＝3.85, p<.001）であった。したがって，友人関係満足第 5 因子の「関係維持満足」に及ぼす影響は，「個人志向性 P」，「社会志向性 N」においてのみ有意であった。なお，このときの回帰式全体の説明率は，R^2=.04であり，有意であった（F(4,489)=6.45,p<.001）。

第二に，全体的結果をふまえた上で，男女別で分析した結果について述べていく。

まず，男性を対象とした分析結果についてみていく。

個人志向性・社会志向性と友人関係満足の関連について検討を行うため，相関関係が求められた。相関関係の分析結果は，Table 4–1 に示す。

「個人志向性 P」と，友人関係満足第 5 因子「関係維持満足」以外の 4 因子全てとの間に，有意な正の相関がみられた（第 1 因子・第 2 因子との間において p<.01, 第 3 因子・第 4 因子との間において p<.05）。「社会志向性 P」と，友人関係満足尺度の 5 因子全てとの間に，有意な正の相関がみられた（第 5 因子との間において p<.05, それ以外全てにおいて p<.01）。「個人志向性 N」と，友人関係満足第 2 因子「相互的受容・理解満足」，第 3 因子「自己優先満足」との間に，有意な負の相関がみられた（順に p<.01, p<.05）。「社会志向性 N」と友人関係満足第 5 因子「関係維持満足」との間に有意な正の相関がみられた（p<.05）。

個人志向性・社会志向性が友人関係満足に及ぼす影響をより具体的に検討するため，個人志向性・社会志向性の各因子項目合計得点を独立変数，友人関係満足の各因子項目合計得点を従属変数とし，重回帰分析が行われた。重回帰分析の結果は，Table 4–2 および Figure 2 に示す。

①友人関係満足第 1 因子「意志疎通満足」に及ぼす個人志向性・社会志向性の影響

「社会志向性 P」においてのみ有意であり，偏回

Table 4-1　個人志向性・社会志向性 PN 尺度の各項目合計得点と友人関係満足尺度の各因子項目合計得点との相関関係（男性）

	意思疎通満足	相互的受容・理解満足	自己優先満足	関係距離満足	関係維持満足
個人志向性 P	.220**	.268**	.131*	.153*	.058
社会志向性 P	.347**	.367**	.273**	.356**	.162*
個人志向性 N	−.055	−.172**	−.134*	−.122	.061
社会志向性 N	−.006	−.046	.017	.041	.145*

** p＜.01（両側）　* p＜.05（両側）

Table 4-2　「個人志向性・社会志向性→友人関係満足」の重回帰分析の結果（男性）

	意思疎通満足	相互的受容・理解満足	自己優先満足	関係距離満足	関係維持満足
個人志向性 P	.111	.187*	.072	.062	.075
社会志向性 P	.330***	.281***	.229**	.329***	.149
個人志向性 N	.047	−.094	−.063	−.017	.106
社会志向性 N	−.009	−.008	.011	.015	.156
重相関係数（R）	.369***	.412***	.284**	.359***	.240*

*** p＜.001　** p＜.01　* p＜.05
（注）数値は標準偏回帰係数（β）を表す

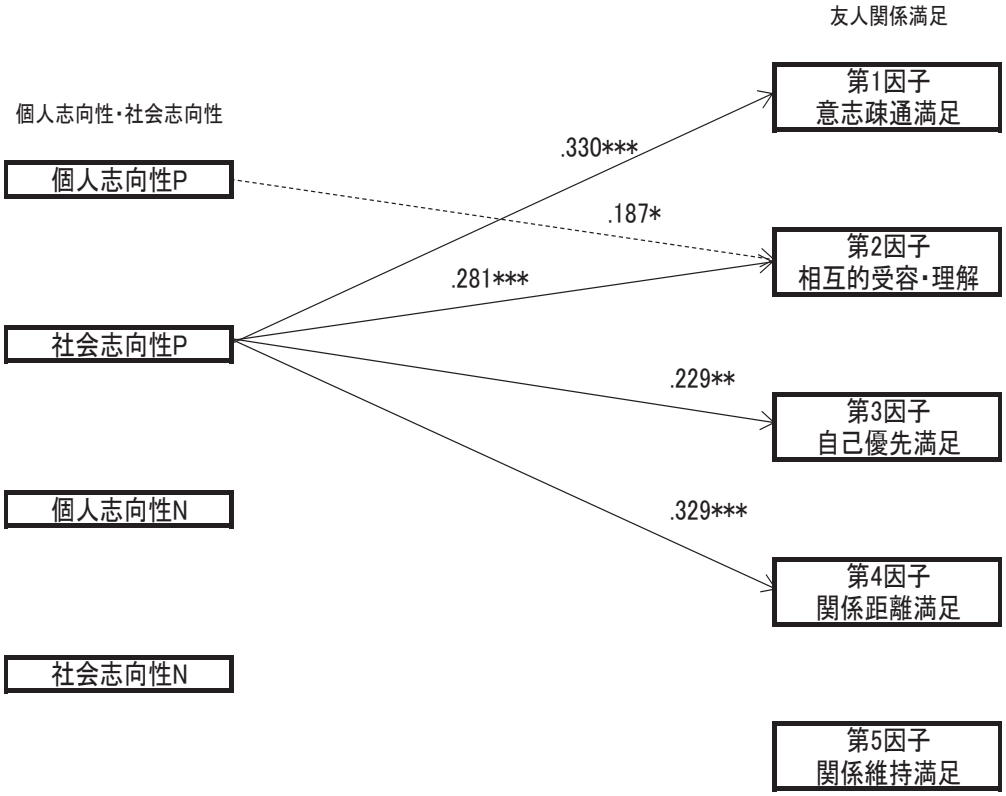

Figure 2　「個人志向性・社会志向性→友人関係満足」の重回帰分析の結果（男性）
（各数値はβ係数を表す）
*** p＜.001　**p＜.01　*p＜.05

帰係数は，（β）=.330（t（222）=4.29, p<.001）であった。なお，このときの回帰式全体の説明率は，R^2=.12であり，有意であった（F（4,222）=8.78, p<.001）。

②友人関係満足第 2 因子「相互的受容・理解満足」に及ぼす個人志向性・社会志向性の影響

「個人志向性 P」の偏回帰係数は，（β）=.187（t（222）=2.37, p<.05）であり，「社会志向性 P」の偏回帰係数は，（β）=.281（t（222）=3.72, p<.001）であった。したがって，友人関係満足第 2 因子「相度的受容・理解満足」に及ぼす影響は，「個人志向性 P」,

「社会志向性 P」においてのみ有意であった。なお，このときの回帰式全体の説明率は，R^2=.16であり，有意であった（F(4,222)=11.36,p<.001）。

③友人関係満足第 3 因子「自己優先満足」に及ぼす個人志向性・社会志向性の影響

「社会志向性 P」においてのみ有意であり，偏回帰係数は，（β）=.229（t(222)=2.88, p<.01）であった。なお，このときの回帰式全体の説明率は，R^2=.06であり，有意であった（F(4,222)=4.87, p<.01）。

④友人関係満足第 4 因子「関係距離満足」に及ぼす個人志向性・社会志向性の影響

「社会志向性 P」においてのみ有意であり，偏回帰係数は，（β）=.329（t(222)=4.25, p<.001）であった。なお，このときの回帰式全体の説明率は，R^2=.11であり，有意であった（F(4,222)=8.23,p<.001）。

⑤友人関係満足第 5 因子「関係維持満足」に及ぼす個人志向性・社会志向性の影響

回帰式全体の説明率は，R^2=.04であり，有意であった（F(4,222)=3.40, p<.05）が，偏回帰係数は有意ではなかった。

次に，女性を対象とした分析結果についてみていく。

個人志向性・社会志向性と友人関係満足の関連について検討を行うため，相関関係が求められた。相関関係の分析結果は，Table 5–1 に示す。

「個人志向性 P」と，友人関係満足第 1 因子「意志疎通満足」，第 2 因子「相互的受容・理解満足」，第 4 因子「関係距離満足」との間に有意な正の相関がみられた（第 2 因子との間において p<.01, それ以外全てにおいて p<.05）。「社会志向性 P」と，友人関係満足第 1 因子「意志疎通満足」，第 2 因子「相互的受容・理解満足」，第 3 因子「自己優先満足」，第 4 因子「関係距離満足」との間に有意な正の相関がみられた（第 3 因子との間において p<.05, それ以外全てにおいて p<.01）。「個人志向性 N」と，友人関係満足第 2 因子「相互的受容・理解満足」との間に有意な負の相関がみられた（p<.05）。「社会志向性 N」と，友人関係満足第 5 因子「関係維持満足」との間に有意な正の相関がみられた（p<.01）。

個人志向性・社会志向性が友人関係満足に及ぼす影響をより具体的に検討するため，個人志向性・社会志向性の各因子合計得点を独立変数，友人関係満足の各因子項目合計得点を従属変数とし，重回帰分析が行われた。重回帰分析の結果は，Table 5–2 および Figure 3 に示す。

①友人関係満足第 1 因子「意志疎通満足」に及ぼす個人志向性・社会志向性の影響

「社会志向性P」においてのみ有意であり，偏回帰係数は，（β）=.275（t(262)=4.15, p<.001）であった。なお，このときの回帰式全体の説明率は，R^2=.08であり，有意であった（F(4,262)=6.89, p<.001）。

②友人関係満足第 2 因子「相互的受容・理解満足」に及ぼす個人志向性・社会志向性の影響

「社会志向性 P」においてのみ有意であり，偏回帰係数は，（β）=.260（t(262)=4.00, p<.001）であった。なお，このときの回帰式全体の説明率は，R^2=

Table 5–1　個人志向性・社会志向性 PN 尺度の各項目合計得点と友人関係満足尺度の各因子項目合計得点との相関関係（女性）

	意思疎通満足	相互的受容・理解満足	自己優先満足	関係距離満足	関係維持満足
個人志向性 P	.153*	.197**	.063	.146*	–.037
社会志向性 P	.294**	.319**	.145*	.285**	.086
個人志向性 N	–.034	–.145*	–.086	–.063	.030
社会志向性 N	–.017	–.095	.044	.110	.220**

** p＜.01（両側）　* p＜.05（両側）

Table 5–2　「個人志向性・社会志向性→友人関係満足」の重回帰分析の結果（女性）

	意思疎通満足	相互的受容・理解満足	自己優先満足	関係距離満足	関係維持満足
個人志向性 P	.097	.149	.116	.227**	.075
社会志向性 P	.275***	.260***	.090	.204**	.059
個人志向性 N	.013	–.112	–.093	–.070	.020
社会志向性 N	.015	–.031	.101	.216**	.254**
重相関係数（R）	.309***	.362***	.181	.346***	.242**

*** p＜.001　** p＜.01　* p＜.05
（注）数値は標準偏回帰係数（β）を表す

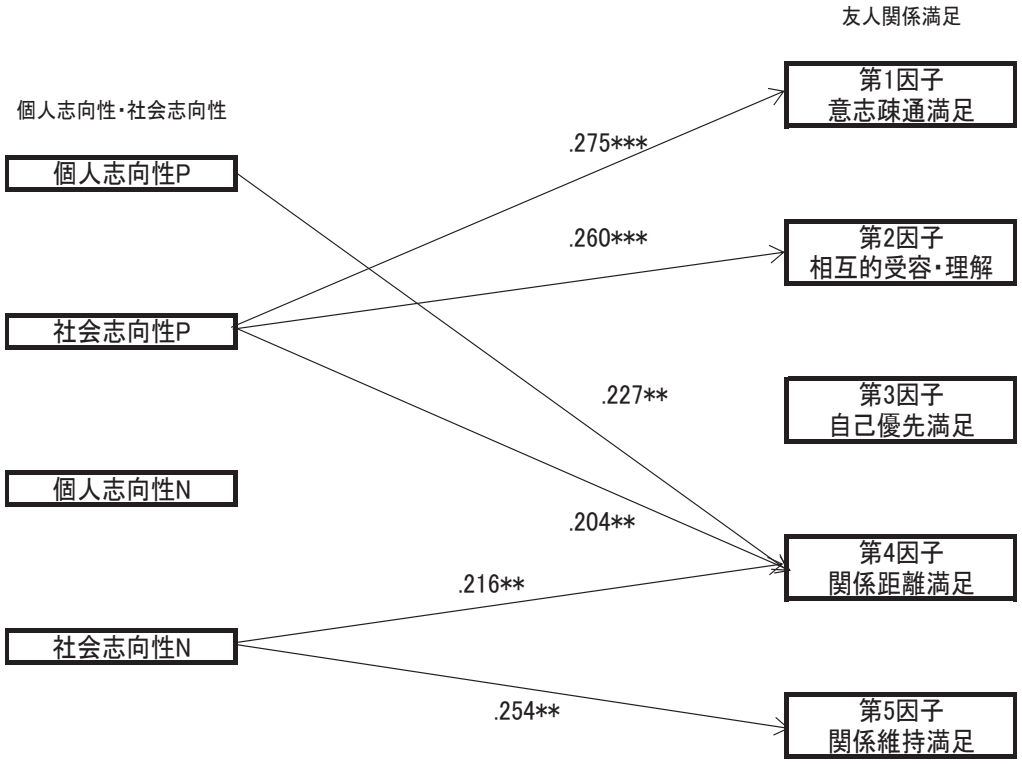

Figure 3 「個人志向性・社会志向性→友人関係満足」の重回帰分析の結果（女性）
（各数値はβ係数を表す）
*** p＜.001 **p＜.01 *p＜.05

.12であり，有意であった（F(4,262)=9.90,p<.001）。

③友人関係満足第３因子「自己優先満足」に及ぼす個人志向性・社会志向性の影響

回帰式全体の説明率は，R^2=.02であり，有意ではなかった。

④友人関係満足第４因子「関係距離満足」に及ぼす個人志向性・社会志向性の影響

「個人志向性Ｐ」の偏回帰係数は，（β）=.227（t(262)=2.96, p<.01）であり，「社会志向性Ｐ」の偏回帰係数は，（β）=.204（t(262)=3.12, p<.01）であった。また，「社会志向性Ｎ」の偏回帰係数は，（β）=.216（t(262)＝3.03, p<.01）であった。したがって，友人関係満足第４因子の「関係距離満足」に及ぼす影響は，「個人志向性Ｎ」を除く，全てにおいて有意であった。なお，このときの回帰式全体の説明率は，R^2=.11であり，有意であった（F(4,262=8.89, p<.001）。

⑤友人関係満足第５因子「関係維持満足」に及ぼす個人志向性・社会志向性の影響

「社会志向性Ｎ」においてのみ有意であり，偏回帰係数は，（β）=.254（t(262)＝3.43, p<.01）であった。なお，このときの回帰式全体の説明率は，R^2=.04であり，有意であった（F(4,262)=4.08, p<.01）。

全体的考察

個人志向性・社会志向性の友人関係満足に及ぼす影響について，主な結果を中心に述べていく。

まず，個人志向性・社会志向性のポジティブな側面についてみていく。

被験者全体を対象とした分析結果から「個人志向性Ｐ」は，友人関係満足第２因子「相互的受容・理解満足」と第５因子「関係維持満足」に，また，「社会志向性Ｐ」は，友人関係満足第５因子「関係維持満足」以外の４因子全てに，正の影響を及ぼすことが示された。ここから，対人場面において，自己あるいは他者へのポジティブな振る舞い方が，友人関係満足の重要な要因になり得ることが示唆された。

さらに男女別の分析結果をみてみると，男性においてのみ，「社会志向性Ｐ」が，友人関係満足第３因子「自己優先満足」に正の影響を及ぼしている。「社会志向性Ｐ」は，“人とのつながりを大切にしている”“社会（周りの人）のために役に立つ人間になりたい”などの項目内容である。このことを考えると，「社会志向性Ｐ」は，人とのつながりを大切にする分，友人にも自分とのつながりを大切にしてほしいと望みやすくする側面があると考えられる。本

研究において，男性の場合，「社会志向性 P」が「自己優先満足」に影響を及ぼすことが示されたのは，このようなことによるものと解釈される。

次に，個人志向性・社会志向性のネガティブな側面についてみていく。

被験者全体を対象とした分析結果をみると，「個人志向性 N」が，友人関係満足第 2 因子「相互的受容・理解満足」に負の影響を及ぼしている。「個人志向性 N」は，“自分中心に考えることが多い” “何ごとも独断で決めることが多い” などの項目内容である。このことを考えると，「個人志向性 N」において示唆される自分中心に物事を捉えやすいことは，相手に自分を受け入れてもらいにくく，また，相手を理解したり受容したりすることにつながりにくいことが考えられる。したがって，本研究において，「社会志向性 N」が，友人関係第 2 因子「相互的受容・理解満足」に負の影響を及ぼすことが示されたのは，このようなことによるものと解釈される。

また，「社会志向性 N」が，友人関係満足第 4 因子「関係距離満足」，第 5 因子「関係維持満足」に正の影響を及ぼしており，さらに男女別の分析結果をみてみると，女性においてのみ，これらの影響がみられた。

まず，「社会志向性 N」が「関係距離満足」に正の影響を及ぼすことについて述べていく。「社会志向性 N」は “相手の顔色をうかがうことが多い” “人の先頭に立つより，多少がまんしてでも相手に従うほうだ” などの項目内容である。このような項目内容から，「社会志向性 N」には，相手が自分のせいで気分を害し，自分に嫌悪感を持つことに対して恐れている側面があると予測できる。そこで，「社会志向性N」は，相手に自分の意見を押し付けないようにして，相手との距離感を保とうとしやすくなるのではないだろうか。

次に，「社会志向性 N」が「関係維持満足」に影響を及ぼすことについて述べていく。「社会志向性 N」には “困ったことがあると，すぐ人に頼ってしまう” という項目内容が含まれる。このことから，「社会志向性 N」は，困ったときにすぐ頼ることができるように，常に頼れる人が自分の側にいることを望む側面があると考えられる。そこで，「社会志向性 N」は，相手との関係維持を重視しやすくなると推察される。

男性における「個人志向性 N」，「社会志向性 N」の友人関係満足への影響をみてみると，友人関係満足尺度の全ての因子に有意な影響がみられなかった。男性の場合，自己に対しても他者に対しても，ネガティブな振る舞いは，友人関係満足を得ることにはつながりにくいと示された。つまり，個人志向性のネガティブな側面は，相手に嫌な思いとして捉えられやすく，それにより，円滑な友人関係を築きにくくするからではないだろうか。また，我慢して相手に従うなどの社会志向性のネガティブな側面は，対人場面において葛藤を抱きやすく，満足な友人関係を築きにくくするものであると考えられる。

今後の課題

本研究では，友人関係満足に影響を及ぼす要因として個人志向性・社会志向性を取り上げ，その影響についての検討を行った。姜ら（2014）の結果および本研究の結果から，信頼感および個人志向性・社会志向性は，友人関係満足に影響を及ぼす要因とされた。今後は，信頼感と個人志向性・社会志向性という，友人関係満足に影響を及ぼすとされた要因同士の関連を検討し，それらがどのように友人関係満足に影響を及ぼすかを調べていくことが必要であろう。それにより，友人関係満足に至るプロセスの示唆を得られると考えられる。

参考文献

Baumeister, R. F., & Leary, M.R.(1995). The need to belong : Desire for interpersonal attachments as a fundamental human motivation. Psychological Bulletin, 117, 497–529

Buhrmester, D.(1996). Need fulfillment, interpersonal competence, and the developmental contexts of early adolescent friendship. In W. M. Bukoeski, A. F. Newcomb, & W. W. Hartup (Eds.), The company they keep : Friendship in childhood and adolescence 158-185. New York : Cambridge University Press.

Erikson, E.H. 1959 Identity and Life Cycle. New York : International Universities Press. エリクソン, E.H. 小此木啓吾訳 1998 自我同一性 誠信書房

Gurtman, M. B. 1992 Trust, distrust, and Interpersonal problems: a circumplex analysis. Jonal of personality and Social Psychology,

第62巻　989–1002
Hartup, W.W., & Stevens, N.(1997). Friendships and adaptation in the life course. Psychological Bulletin, 121, 355–370
伊藤美奈子　1993a　個人志向性・社会志向性尺度の作成及び信頼性・妥当性の検討　心理学研究　第64巻　115–122
伊藤美奈子　1993b　個人志向性・社会志向性に関する発達的研究　教育心理学研究　第41巻　第３号　293–301
伊藤美奈子　1995　個人志向性・社会志向性 PN 尺度の作成とその検討 心理臨床学研究 第13巻 39–47
伊藤美奈子　1993；1995　個人志向性・社会志向性 PN 尺度（堀洋道監修／山本眞理子偏）心理測定尺度集Ⅰ―人間の内面を探る〈自己・個人内課程〉株式会社サイエンス社　129–133
姜信善・南朱里　2014　信頼感が友人関係満足に及ぼす影響についての検討　富山大学紀要９巻第１号　1–15
金子俊子　1994　青年期の自己―他者関係と基本的信頼感及び愛着スタイルとの関連　日本心理学会 第58回大会発表論文　348
金子俊子　2002　青年期女子の愛着スタイルが他者関係に及ぼす影響―基本的信頼感から親密性へのプロセスについて―　大阪産業大学論集,人文科学編　第136号　31–50
岡田涼　2008　親密な友人関係の形成・維持過程の動機づけモデルの構築 教育心理学研究 第56巻　第４号　575–588
小塩真司　1998　青年の自己愛傾向と自尊感情，友人関係のあり方との関連　教育心理学研究　第46巻　280–290
小塩真司　2002　自己愛傾向によって青年を分類する試み―対人関係と適応，友人によるイメージ判定からみた特徴―　教育心理学研究　第50巻第３号　261–270
鈴木貴美子・長江美代子　2012　大学生の友人関係のありかたとアイデンティティの発達　日本赤十字豊田看護大学紀要７巻１号　133–144

謝辞

本研究を実施するにあたり，調査にご協力くださいました富山大学の先生方，また多くの学生の皆さまに，心より御礼申し上げます。

（2014年10月20日受付）
（2014年12月10日受理）